

榮山江流域における 円筒埴輪の展開過程

The Process of Development of Cylindrical Haniwa
in the Yeongsan River Basin

廣瀬 覚

HIROSE Satoru

はじめに

①チャラボン古墳出土埴輪の検討

②金山里方台形古墳・老迪遺跡出土埴輪の検討

③榮山江流域における円筒埴輪の系列と展開

おわりに

【論文要旨】

本稿では、朝鮮半島西部の榮山江流域で出土する円筒埴輪の展開過程について、近年の新出資料を踏まえて再検討し、現段階での私見を述べた。具体的には、霊巖・チャラボン古墳、咸平・金山里方台形古墳およびそれと密接な関係にある老迪遺跡から出土した埴輪について、観察所見を踏まえて形態・製作技術の特徴を詳細に検討した。その結果、チャラボン古墳の埴輪は、この地域において一般的である倒立成形技法を用いる円筒埴輪の一群に属するものであることが確認できた。その一方で、金山里古墳・老迪遺跡の埴輪は、日本列島の埴輪と同様に正立成形技法で形作られ、かつ突帯製作に割付技法や押圧技法を用いており、従来、榮山江流域では知られていなかった技術系譜に属することが明らかとなった。

以上の成果を踏まえて、榮山江流域における円筒埴輪を倒立成形系列、突帯割付系列、有底穿孔系列の3系列に大別し、その展開過程について予察を示した。とりわけ、榮山江流域において主体をなす倒立成形系列について、反転作業を2回繰り返す倒立成形の工程が日本列島の一部の埴輪で見られる倒立技法とは根本的に異なることを指摘し、同技法が上半部に本来的な土器形状を忠実に表現する徳山里9号墳に代表されるタイプの埴輪の成形技法を継承したものであることを説いた。チャラボン古墳の埴輪は、上半部と下半部の境界付近に屈曲や傾斜変換をもつ点で、徳山里9号墳タイプから通常の円筒形を呈する埴輪への移行期の資料と位置づけられる。そうした過渡期を経て、明花洞古墳例や月桂洞1号墳例にみるより単調な形状へと変遷するものと理解できる。

榮山江流域ではこのほかにも、現状では類例が少ないものの、突帯割付系列や有底穿孔系列、さらには日本列島のものに酷似する外面タテハケ調整の埴輪も混在しており、この地域の埴輪の展開過程が決して一元的ではなかった様子が明らかになりつつある。埴輪の導入契機は、複数存在したとみて間違いなく、流域内の各勢力と日本列島との多角的な交流を反映したものと評価される。

【キーワード】 榮山江流域、埴輪、展開過程、倒立成形、突帯割付、系列

はじめに

朝鮮半島南西部の栄山江流域において、日本列島の埴輪に類似した土製品が存在することが明確となったのは1990年代中頃のことである。韓国内で「円筒形土器」（ないしは「埴周土器」）と呼ばれるこの種の土製品をめぐっては、同地域における前方後円墳の評価とも密接にかかわって、当初から活発な論議が展開してきた。しかしながら、当時、知られた「円筒形土器」の良好な資料は、光州・月桂洞1・2号墳、同・明花洞古墳の3例のみであり、やや遅れて羅州・徳山里9墳、同・新村里9号墳の2例が加わったものの、これらの断片的な資料から栄山江流域の「円筒形土器」の展開過程を跡付ける作業は決して容易ではなかったといえる。一見して日本の埴輪からの型式学的な距離が際立っていたこともあって、これまで筆者自身はこの地域の「円筒形土器」の展開に関する議論には積極的にはかかわってこなかった。

ところが、昨今の栄山江流域における墳丘整備を主目的とする古墳の学術調査の進展は目覚ましく、「円筒形土器」の出土事例は飛躍的に増加してきており、その展開過程を流域内で系統立てて整理することが可能になりつつある。とりわけ、近年の霊巖・チャラボン古墳、咸平・金山里方台形古墳から出土した新資料は、この地域における「円筒形土器」の展開過程に再検討を迫るものといえる。幸い、筆者はこの2古墳、および金山里方台形古墳と密接な関係にある老迪遺跡から出土した資料を熟覧する機会に恵まれた。小論ではこれらの資料を詳細に検討した上で、栄山江流域における「円筒形土器」の展開過程、および日本列島の埴輪との関係について、現段階での私見を述べることにしたい。

なお筆者は日本列島の埴輪を、①底部を穿孔ないしは開放して製作することにより実用性を喪失した土器・土製品であるとともに、②一定量の個体数でもって墳丘を圍繞する、という2点でもって定義するが、この定義に基づくかぎり、朝鮮半島出土の「円筒形土器」も埴輪と呼んで何ら差し障りない。栄山江流域の前方後円形の墳墓を前方後円墳と呼ぶかどうかの議論と同様に、当初から埴輪に対して、倭の王権との政治的な関係の有無を念頭に用語の異同に拘泥するのは建設的な議論ではないと考える。

埴輪は、倭の王権中枢部で創出された葬送儀礼における器物の一部であるが、日本列島においても、王権中枢部の埴輪と形式的・様式的に特徴を全く同じくするものの分布は、時間的にも、空間的にも限られている。埴輪の広域な展開には、仮器で墳丘を圍繞するという儀礼行為自体の共有に第一義を見出すべきなのである。そうした広域の信仰圏の中に工人移動をともなうような埴輪の直接伝播が存在しているのであって、日本列島内においても埴輪を介した王権との直接的な関係が見出せるのは後者の場合に限られる〔廣瀬2015〕。日本列島の埴輪と巨視的には同じ形態を採用し、墳丘圍繞に用いられたことが確実視でき、かつ一部の古墳では形象埴輪の存在も明らかになった現在、敢えて栄山江流域の資料に対して埴輪の名称を避ける理由は存在しないと考える。したがって、以下では「円筒形土器」（「埴周土器」）を埴輪と呼ぶことにする。

①…………チャラボン古墳出土埴輪の検討

1. チャラボン古墳の埴輪の特徴

霊巖・チャラボン古墳は、従来、4世紀代にさかのぼる前方後円墳と目されてきたが、近年の（財）大韓文化財研究院による墳丘の整備・復元のための発掘調査で、墳丘長は37m前後と判明し、出土した土器類から5世紀後葉の築造と理解されるようになった。また、墳丘の全面的な調査により、周溝内から多くの円筒埴輪、および笠形の木製樹物が出土し、注目を集めている。円筒埴輪は器形がある程度判明するものだけでも60個体以上が出土しているが、木製樹物を除くと形象埴輪の出土はなく、また日本列島でいうところの朝顔形埴輪⁽¹⁾も出土していない。

円筒埴輪は2条突帯3段構成であるが、各段の間隔は均等ではない（図1）。中段、上段、下段の順で間隔が広くなり、中段が5cm前後と極端に狭くなるタイプも存在する。その間隔の狭い中段に逆三角形透孔を3孔穿つ。全体の器形は、底部径10～15cmに対して口縁部径が35～42cmと大きく、逆台形状のプロポーシオンとなる。口縁部は外開きで、いずれも端部を強く折り返す。下段は下半が傾斜変換して直立するものが多く、そのなかには一条目突帯のやや下方に明瞭な屈曲部をもつ個体が一定量含まれる（図1-5～7）。

製作技法上の特徴としては、第一に、成形に倒立技法を用いている点が特筆される。上述の下段の器形の傾斜変換も同技法による成形工程に起因するが、同技法の詳細については、後述することにする。器面調整は、外面は鳥足垂直線文（平行線＋鳥足文）、多線横走集線文（平行線に一定間隔で垂直線が交わる）によるタタキで、内面は横方向のナデ調整を基調とする。

突帯は幅細で高く突出するものが多く、端面はM字形にくぼむものが多い。ただし、倒立技法に起因して、一条目突帯は下稜の方が突出する傾向が認められる。また、2条目突帯貼付位置に対応する内面には、大半の個体で三角形ないしは円形を呈する圧痕が残る。突帯貼付に際して、工具ないしは指頭で内面側を支持した痕跡とみられる。また、突帯の剥離面は、タタキ目がナデ消され、かつ内彎している場合があり、突帯の貼り付け位置にヨコナデが加えられたことがうかがえる。ただし、上述のように各段の間隔は不均等であり、日本列島の埴輪でみられるような専用工具を用いた割付行為はなされていないものと考えられる。

2. 倒立成形技法の復元

上述のように、チャラボン古墳の円筒埴輪における製作技法上の最大の特徴は、倒立技法を用いた製作工程にある。その工程は日本列島でみられる倒立技法の手順とは異なり、最初に完成時の上半部を成形した後に倒立し、その上部に完成時の下半部となる部分を積み上げ、最終的に器形全体の天地を再度反転させて完成に至る、というものである。上述の一条目突帯の形状が天地逆転する点も、下半部成形の工程に1条目突帯の貼り付けが組み込まれているためと理解できる。この上半部成形→倒立→下半部成形→再倒立、という工程は、かつて月桂洞1号墳出土埴輪において小栗明彦が復元した工程〔小栗1997〕と同じである。

これに対して李暎澈は、栄山江流域の円筒埴輪において一般的に認識されてきた倒立技法について疑義を呈し、チャラボン古墳出土埴輪の製作工程を、上半部と下半部をそれぞれ個別に成形した上で、両者を接合する分割成形によるものと理解する〔李 2015〕⁽²⁾。しかしながら筆者は、以下の理由から、分割成形による円筒埴輪の製作は技術的に困難と考える。

まず、筒形の土製品を手捏ねで分割して製作する場合、複数のパーツの径を完全に一致させることは困難であり⁽³⁾、したがって、接合に際しては、径が上回った側の端部を絞り込む作業が必要となる。しかしながら、分割成形が想定されている埴輪において、上半部と下半部の境界付近にそうした絞り込みをおこなった痕跡は一切みられない。そもそも、分割成形で一定の高さのある円筒埴輪を製作する場合、接合後の荷重に耐えるべく、パーツ同士はある程度、乾燥が進んでいることが前提となるが、乾燥により硬化した部分を絞り込み形状を変化させつつ接合する作業はいっそう困難と言える。こうした理由から、筆者は円筒埴輪における分割成形の採用には懐疑的である。

チャラボン古墳の埴輪は、上半部・下半部とも粘土紐を巻き上げて製作していることが内面や断面に残る粘土紐の接合痕跡から明らかであり、かつ、完成時の状態で上半部は内傾接合、下半部は外傾接合となっている。これに対応して、成形・調整時のタタキ目の鳥足文は上半部では右側に開き、下半部では左向きに開く。鳥足文タタキを有する栄山江流域の一般的な土器では、鳥足文は右側に開くものが大半である⁽⁴⁾ことを踏まえると、製作者の大半は右利きであり、内傾接合で粘土紐を巻き上げ、土器に対して左側からタタキを施すのが、当地域の土器製作の基本的なあり方であったと理解できる。チャラボン古墳の埴輪の場合、見かけ上、粘土紐の巻き上げが外傾接合で、鳥足文が左開きとなる下半部は、完成時とは天地を逆にして倒立状態で成形されたとみて間違いのない。完成時の底部下端が丁寧にナデ調整されている点も、下半部の倒立成形を傍証する。

その上で注目されるのは、チャラボン古墳の埴輪の場合、倒立位置の内面にとりわけ明瞭な粘土紐接合痕が残る、かつ下半部上端の粘土が上半部側の器面に広く覆い被さるケースが多い点である。下半部上端の粘土が被さる上半部側の内面は予め丁寧にヨコナデ調整されており、断面観察からは、上半部下端が擬口縁状に仕上げられている様子を確認できる場合もある。これにより、上半部が成形された後に器形が反転され、成形当初に底部であった部分が口縁部状に丁寧にナデ調整され、かつ乾燥期間がおかれたことがうかがえる。上述のように、接合に伴う絞り痕跡が一切見られないことに加えて、事前にナデ調整された上半部端部に対して下半部側からのみ粘土が貼り付けられている状況からも、チャラボン古墳の埴輪を分割成形の所産とみることは困難である。下半部全体の粘土紐接合が見かけ上は外傾接合であり、同じく下半部上端の粘土も外傾接合で上半部を覆うことから、先行して製作し倒立させた上半部の上に、単純に内傾接合で粘土紐を巻き上げて完成時の下半部を成形していくのが実際の工程と考えられる。巻き上げが完了すると、そのまま倒立状態で下半部外面にタタキを加え、上端部（完成時の底面）をナデ調整した後に、最終的に全体を再度倒立して完成に至るものと理解できる。

前述のように、チャラボン古墳では、下段中に明瞭な屈曲部を有するタイプが存在するが、ちょうどその屈曲部が倒立位置に対応する。それらも屈曲部をもたないタイプと同様に、上半部の内面下端に下半部側からの粘土が広く覆い被さることから、やはり分割成形ではなく倒立成形によるものと理解できる。下半部側の巻き上げの粘土が上半部側に広く覆い被さるのは、半乾燥状態にあっ

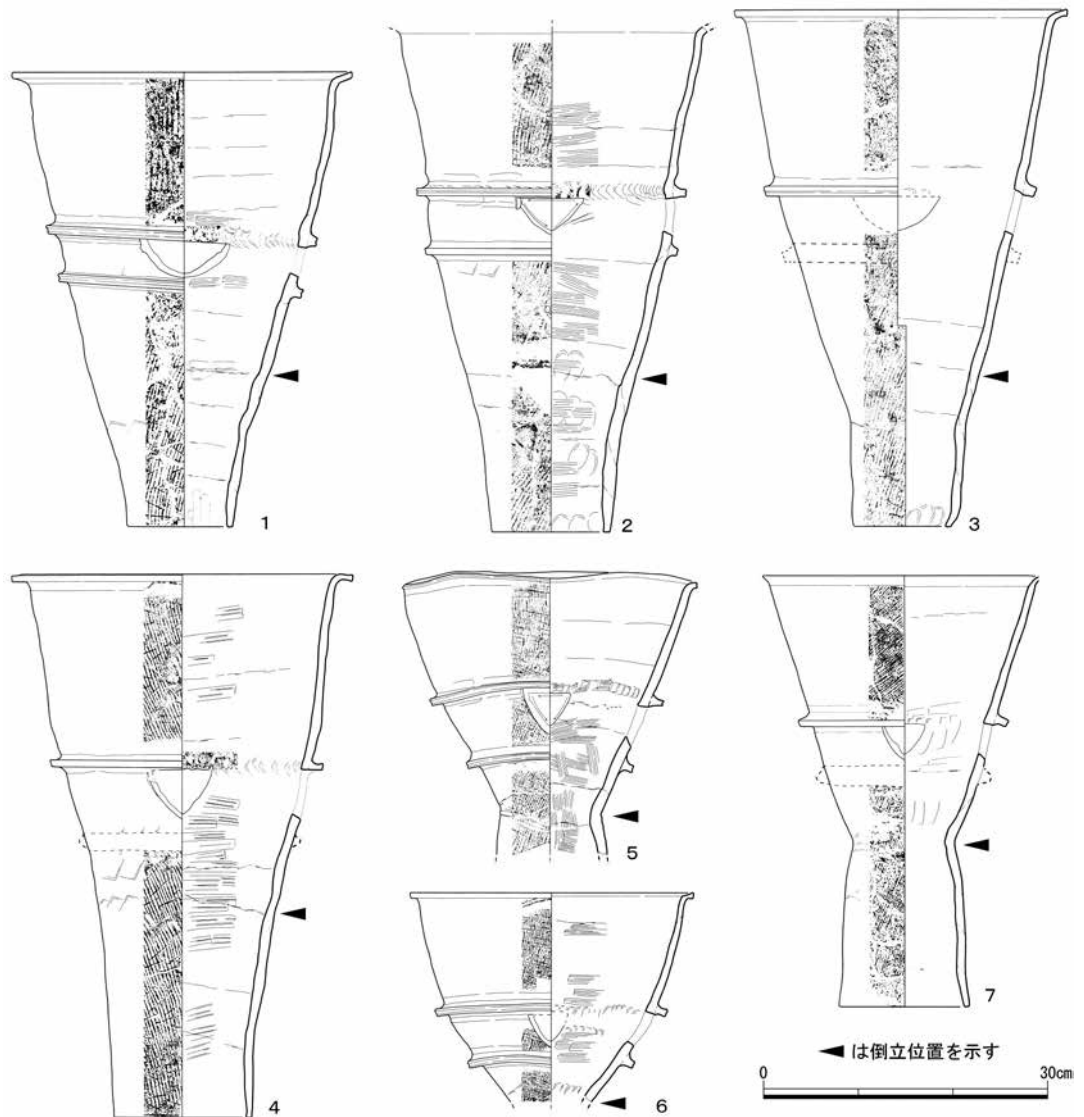


図1 チャラボン古墳出土埴輪(1:8)

た上半部との接合面を広く確保することで、その上部に巻き上げられる粘土の荷重を支える効果を期待したものと推測される。

3. チャラボン古墳出土埴輪の意義

以上のようなチャラボン古墳出土埴輪の検討成果は、これまでの栄山江流域における埴輪の展開過程の理解に再考を促すものといえる。とりわけ、チャラボン古墳の埴輪が、これまで栄山江流域の埴輪の典型例とされてきた明花洞古墳や月桂洞古墳群と同様の倒立技法を用いた一群として評価できる点は、流域内における埴輪の展開を系統的に理解する上で重要な着眼点となる。一方で、朝顔形埴輪が不在である点や、透孔はすべて逆三角形である点、下段に明瞭な屈曲部を有するタイプが含まれる点など、従来、この地域の円筒埴輪では知られていなかった様相を帯びている点も事実であり、それらの点も含めて、広い視野からの検討が必要となる。

また、チャラボン古墳から出土した大量の埴輪は、全面調査により得られたものであり、その生産体制の全体像がうかがい知れる点でも注目される。チャラボン古墳の出土埴輪は、全体的なプロポジションや製作手法、タタキ原体の異同から4類型以上の同工品の抽出が可能である。とりわけ、前述の下段部に明瞭な屈曲を有するタイプは、外面調整に多線横走集線文のタタキ工具を集中的に用いており、特定の工人の製品として理解できる。細部の手法差が反復的に表れている様子から、4人 + α の製作者が安定的に製作に従事していた様子が読み取れる。

以上のような成果を踏まえ、栄山江流域内でのチャラボン古墳の埴輪の位置づけについては、他古墳の様相も吟味しながら、最後に改めて検討することにする。

②……………金山里方台形古墳・老迪遺跡出土埴輪の検討

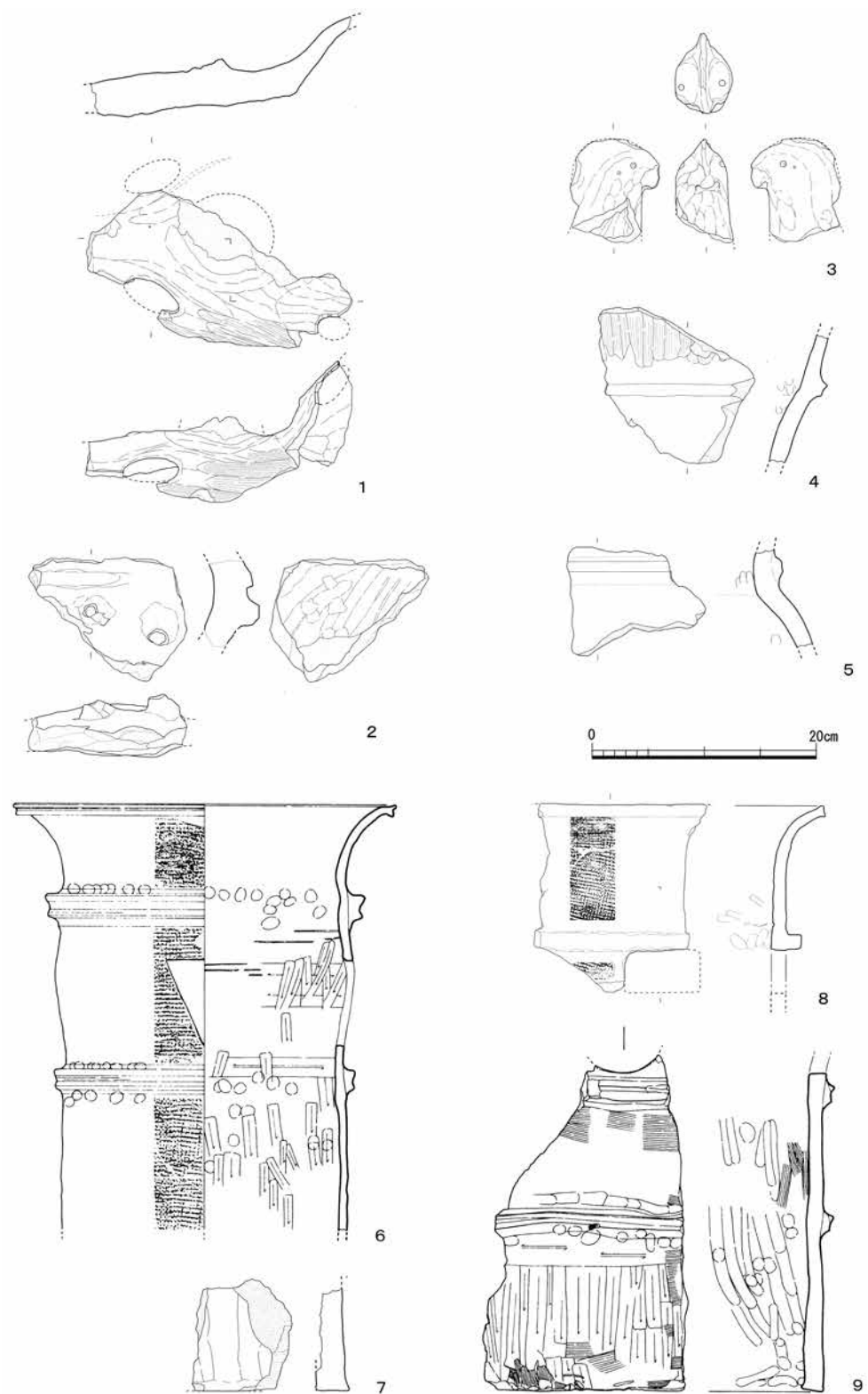
咸平・金山里方台形古墳は一辺約51m、高さ約9mを測る葺石を備えた大型方墳で、2014年10～12月に（財）全南文化芸術財団 全南文化財研究所によって試掘調査が実施された。円筒埴輪とともに、朝鮮半島で初となる形象埴輪が出土したことにより一躍、注目を集めるに至った。古墳のすぐ南西には、以前から埴輪の出土が知られる老迪遺跡が位置し、また東700mには前方後円墳である長鼓山古墳が旧咸平湾を臨むように位置しており、三者の密接な関係が指摘されている〔高田2017〕。ここでは、金山里方台形古墳と老迪遺跡の出土埴輪をあわせて検討する。

1. 金山里方台形古墳出土の埴輪

前述のように金山里方台形古墳からは、形象埴輪が出土している。報道発表段階では、人物埴輪の存在も指摘されたが、当初、人物埴輪のものとみられた破片は馬形埴輪の鞍部の破片と認識が改められた。現状で確認できる器種は鶏形と馬形であるが、いずれも破片資料であり、全形をうかがえるものはない。これらの形象埴輪片は、内・外面とも大部分がナデ調整であるが、内面が指ナデであるのに対し、外面は筋状の擦痕を残すものが多く、また、透孔のある部位不明の筒形の破片には部分的に日本列島の埴輪にみるハケメ調整と同様の粗い条痕が残る。焼成は軟質ではあるが、いずれも無黒斑で橙～暗褐色に焼き上がる。

鶏形埴輪は、頭部の破片が出土している。端部は破損するものの鶏冠の付加が確認でき、小孔で目と耳を表現する（図2-3）。基本的な造形は日本列島の鶏形埴輪に従っているとみられるが、体部の特徴のわかる破片は出土しておらず、これ以上の詳細な検討は困難である。

馬形埴輪は、面繫、尻繫、鞍、腹・脚部の破片が出土している。馬形埴輪も基本的な特徴は日本列島のものを模しているといえるが、細部では一般的な馬形埴輪との相異も認められる。例えば面繫では、一般的に額に頭絡の革帯を巡らせるが、そうした形跡が一切確認できない（図2-1）。額に帯を巡らせない特徴は大山古墳など列島の初期の馬形埴輪に類例はあるが、接合部よりもかなり高い位置に穿孔する耳の表現とも相俟ってやや違和感を覚える。また、剥離痕跡から角状タテガミの存在が推測できるが、角状タテガミは通常は耳の位置よりも前方に表現されることはない。しかしながら、金山里方台形古墳例の場合、角状タテガミのものとみられる接合痕は耳よりもあきらかに前方に位置している。さらに、尻繫の破片には、鈴とみられる突起や革帯の隆起が認められるもの



1～5・7・8：金山里方台形古墳 9・6：老迪遺跡
1・2：馬形埴輪 3：鶏形埴輪 4・5：朝顔形埴輪（二重口縁） 6～9：円筒埴輪

図2 金山里方台形古墳と老迪遺跡の埴輪

の、表現は不明瞭で簡略化が著しい(図 2-2)。脚部も明確な蹄の表現はない。破片資料のため全体像は不詳ながら、以上の点は金山里方台形古墳出土の形象埴輪が、日本列島からの直接的な伝播によるものではなく、間接的な模倣によるものである可能性を示唆する。その点を踏まえながら、つぎに円筒埴輪に目を転じよう。

円筒埴輪は、端部を強く外反させる口縁部片、突帯を有する胴部の破片、底部の小片があり、加えて、朝顔形埴輪の頸部、および口縁部片が出土している(図 2-4・5)。朝顔形埴輪は日本列島と同様の二重口縁であり、現状では柴山江流域で唯一の例となる。いずれも破片資料のため、一段中の透孔の数については不明であるが、円形透孔の一部とみられる破片が 2 点ある。図 2-8 の外反口縁の破片の透孔については、実測図では方形透孔として復元されているが、隅部が円弧を描き、かつ下方にむかって内彎することから、半円形透孔なると可能性がある。

外面調整は、形象埴輪と同様に筋状の擦痕によるナデ調整が多く、大半が縦方向にナデ上げるが、図 2-4 の朝顔形埴輪の一次口縁部分はヨコナデである。一方、図 2-8 の円筒埴輪の口縁部片は格子タタキ調整で、ヨコナデ調整される外反部付近にも先行するタタキ痕跡が散見できる。口縁部は、当初、直立状に成形され、下半部と一体的にタタキ調整された後、最終的に端部にヨコナデを加えながら外反させて完成に至るものと考えられる。内面調整はいずれもナデ調整であるが、部分的に板状工具が用いられており、砂粒が動くほど強くケズリ状に調整されている部分もある。

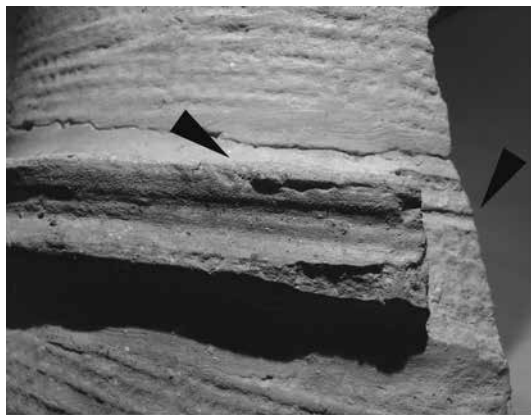
製作技法の上で注目されるのは、突帯の剥離面に突帯割付にともなう沈線(凹線)が確認できる点である(図 3-4)。突帯上辺にいわゆる L 字形工具下端の擦痕が認められるものがあることから、突帯の割付にいわゆる凹線技法(当古墳の場合、先刻が細く鋭いため、厳密には凹線というよりは沈線状を呈する)が使用されたものと判断できる。これまで、朝鮮半島の埴輪において、突帯割付技法の使用は指摘されてきておらず、注目に値する。確認できる沈線の中には、2 本を 1 単位として引かれた二重沈線(凹線)となるものがあり、こうした特徴は日本列島では TK73 型式期以降、散見されるようになる。金山里方台形古墳出土埴輪の年代比定のがかりのひとつとできよう。

また図 2-7 の底部片は、自重で上部の器壁よりも底面が幅広となっているが、その底面には粘土帯を逆 Z 字形に接合した痕跡と、作業台の木目、および作業台上に敷かれたとみられる草木類の⁽⁶⁾圧痕が残る。残存高は 10cm 程であるが、残存範囲の断面に内傾接合が確認できることから、柴山江流域に多い倒立成形ではなく、日本列島で一般的な正立成形によるものと判断できる。

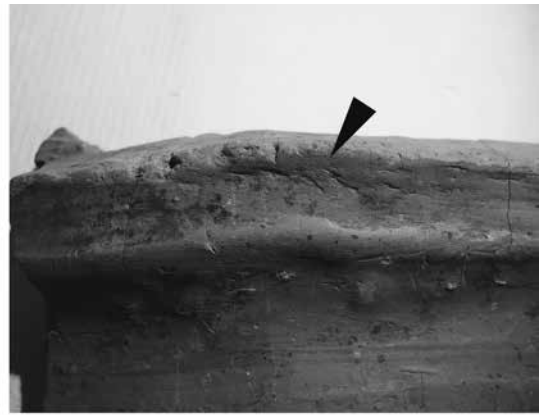
2. 老迪遺跡出土の埴輪

老迪遺跡では、(財)湖南文化財研究院による 2003 年のカ地区の発掘調査で、13 点の埴輪片が出土している。前述のように、同遺跡は金山里方台形古墳に近接しており、かねてより同古墳との関連性が指摘されてきたが、金山里方台形古墳から埴輪が出土したことにより、両者の埴輪の比較が可能となった。確認できる器種は円筒埴輪のみで、いずれも破片であるが、全形がうかがえる資料 2 点を含む。

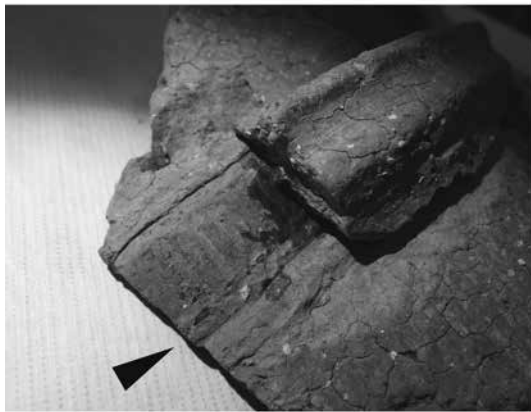
図 2-6 は口縁部とその下段が残存する破片で、口縁部高 8cm、突帯間隔 15cm を測る。口縁部は突帯の直上から大きく外反し、端部を折り返す。口縁部直下の段には逆三角形透孔が配置されている。約 90 度の位置に 2 孔が穿たれており、一段中に 4 孔配置されていたものと考えられる。製



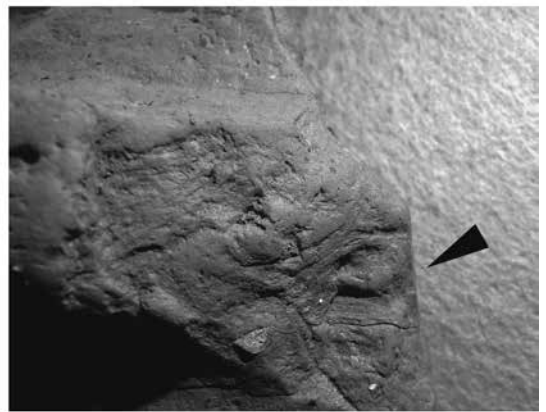
1. 突帯端面にタタキ目、剥離面に沈線（老迪遺跡）



2. 突帯端面にタタキ目（老迪遺跡）



3. 突帯剥離面に二重沈線（老迪遺跡）



4. 突帯剥離面に二重沈線（金山里方台形古墳）

図3 金山里方台形古墳・老迪遺跡にみる突帯製作技法

作技法では、突帯剥離面に金山古墳例と同様の沈線が残されており、割付技法の使用が確認できる点が特筆される。外面調整は格子タタキで、ヨコナデ調整で仕上げられる口縁部や突帯端面にもヨコナデに先行するタタキの痕跡が散見される。内面調整はタテ・ヨコ方向のナデ調整であるが、部分的にナナメないしはヨコ方向のヘラケズリが認められる。

図2-9は第1・2段目と3段目の一部が残存する。底部高15cm、突帯間隔は11cmを測り、三段目には円形ないしは半円形透孔の一部が残存する。断面観察によると、粘土紐の接合は内傾接合である。また、底面には、金山里方台形古墳出土の底部片と同じく、粘土帯を逆Z字形に接合した痕跡と、作業台の木目ないしは草本類の圧痕が残っており、日本列島の一般的な円筒埴輪と同様に、粘土帯で基部を巡らせ、正立状態で全体の成形がなされたものと判断できる。外面調整はタテ方向のナデであるが、一部に先行するタタキらしき痕跡が認められる。内面調整も同様にタテ方向のナデである。なお、最下段外面には、上述のナデ調整に後出し、それとは無関係の横方向の擦痕が部分的に残っており、突帯割付工具（いわゆるL字状工具）の軸部分が器面を擦った痕跡と考えられる。

このほかにも、円筒埴輪の破片が数点出土している。外反口縁の破片が2点あり、口縁部高は

6cmと7cmで他の段より短い点が図2-6および金山里方台形古墳例（図2-8）と共通する。胴部片には、円形・逆三角形の透孔の一部を残すものがある。器面調整はタタキ・ナデで、タタキには平行タタキに加えて、鳥足文タタキが含まれる。突帯は、断面形状が通常のM字形・台形のものに加えて、三角形を呈するものも含まれ、M字形や台形のものには、端面にタタキ工具による板オサエの痕跡を残すものがある（図3-1・2）。剥離面には割付技法の沈線が散見されるが（図3-1・3）、剥離面以外にも、同様の沈線を突帯の上・下辺付近や端面に装飾的に施すものがある。割付技法の沈線は、金山里方台形古墳と同様に二重沈線となるものがある。

3. 金山里方台形古墳・老迪遺跡出土埴輪の評価

老迪遺跡から出土した埴輪は、かねてより隣接する金山里方台形古墳と密接な関係にあるものと推測されてきたが、実際に両者は細部の形態・製作技法の点で共通性が高い。形象埴輪は金山里方台形古墳のみの出土であるため比較ができないが、円筒埴輪は上述のように、口縁部は短く外反し、胴部に三角形・円形透孔を配置する点、内傾接合で粘土紐を巻き上げ、正立成形で全体を形作り、外面はタタキ・ナデ調整を主体とする点、突帯割付技法として沈線（凹線）技法を使用し、突帯端面をタタキ工具で押圧成形する点などが、両遺跡間で一致している。胎土に赤褐色の風化礫を含む特徴を共有する点からも、金山里方台形古墳と老迪遺跡の出土埴輪は、同一契機で製作されたものと理解できる。東700mに位置する咸平・長鼓山古墳からも、両遺跡と同様に突帯端面にタタキ目を残す埴輪が採集されている〔国立羅州文化財研究所2015a〕。高田貫太が指摘するように、金山里方台形古墳および長鼓山古墳の埴輪の製作地として老迪遺跡を理解することができる〔高田2017〕。

その上で、特筆すべきは、栄山江流域出土の円筒埴輪の多くが倒立技法で製作されるのに対して、金山里方台形古墳・老迪遺跡出土の円筒埴輪は同技法を用いず、日本列島の埴輪と同様に正立状態で成形される点である。加えて、突帯製作に割付（凹線）技法や押圧技法を採用する点でも、栄山江流域の他の一般的な円筒埴輪よりも、日本列島のものとの親近性が高い。この点は、現状では栄山江流域で唯一となる形象埴輪や二重口縁の朝顔形埴輪が共伴することとも響き合う。ただし、器面調整は、一部にハケメ調整がみられるものの、タタキやナデ調整が主体となる点が象徴するように、日本列島の埴輪そのものとは言い難いことも事実であり、この一群の埴輪の評価については、次節における栄山江流域全体での検討の中で改めて論じることにはしたい。

③……………栄山江流域における円筒埴輪の系列と展開

1. 系列の整理

当地域の埴輪については、従来、林永珍によって壺形と筒形に大別され、さらに筒形は壺筒形と円筒形に細分された上で、形式ごとの変化が追究されてきた〔林永珍2002〕。これに対して、近年、朴亨烈は、林永珍分類を概ね踏襲して当地域の埴輪をⅠ・Ⅱ型式に大別しつつ、細部では林永珍とは異なる型式編年案を示している。朴亨烈分類のⅠ型式は林の壺形に、Ⅱ型式は筒形に概ね対応するが、Ⅰ型式については、日本列島の壺形埴輪と同様に、形態的に非常に多様なものを含んでおり、

その系統的な整理は現在の筆者の力量では困難である。以下では、日本列島の円筒埴輪に相当する朴分類のⅡ型式について、チャラボン古墳、金山里方台形古墳・老迪遺跡出土埴輪の観察所見を踏まえて再検討することにする。

まず、製作技術の差に基づいて栄山江流域の円筒埴輪を以下の3系列に区分する。

倒立成形系列： 徳山里9号墳、新村里9号墳、旺村里2号墳、チャラボン古墳、明花洞古墳、月桂洞1・2号墳

突帯割付系列： 金山里方台形古墳（老迪遺跡）、高敞・七巖里古墳

有底穿孔系列： 沃野里方台形古墳

倒立成形系列は、光州・明花洞古墳や同・月桂洞1号墳出土資料を通じて、栄山流域の円筒埴輪として、よく知られてきた一群の埴輪で、上半部を先行して製作する特徴的な倒立技法を用いる。チャラボン古墳の埴輪も同技法を用いる点で、この一群に位置づけられる。形態的には大きく異なるが、羅州・徳山里9号墳、同・新村里9号墳、高敞・旺村里2号墳例は、後述の理由から、この系列の古相に属すと理解する。

突帯割付系列に属す資料は、凹線（沈線）による突帯割付技法を用い、かつ正立成形で全体を形成していく点で、倒立成形系列とは明らかに技術系譜が異なる。短く外反する口縁部形態を採用し、突帯端面をタタキ工具で押圧する点も本系列の特徴として指摘できよう。現状では明確なものは金山里方台形古墳（老迪遺跡）例のみであるが、高敞・七巖里古墳では剥離した突帯片の接合面にタタキ調整の痕跡を消すように引かれた凹線がボジ状に転写されており、突帯割付技法が使用された様子がうかがえる。正立成形で製作され、外面をタタキ調整する小型円筒埴輪の底部が出土していることから〔(財)大韓文化財研究院2017〕、七巖里古墳例はこの系列の範疇に属するものとみられる。また、前述のように、金山里方台形古墳（老迪遺跡）に隣接する咸平・長鼓山古墳からは突帯端面にタタキ目を残す破片が、和順・白巖里古墳からは外面に格子タタキを施し短く外反する口縁部片が採集されていて〔国立羅州文化財研究所2015a〕、両例とも本系列に属す可能性がある。

一方、有底穿孔系列は、外見上は円筒埴輪であるが、完全な筒形ではなく、底部を閉塞して製作した上で、焼成前にその中央に円孔を穿つもので、現状では霊巖・沃野里方台形古墳のみが該当する。朴亨烈分類では、底部を閉塞して製作される点を重視して沃野里方台形古墳例をⅠ型式（壺形埴輪）として取り扱う。たしかに平底の底部を製作し、その上に筒形の器形を成形していくあり方は、咸平・チュンラン遺跡例など一部のⅠ型式の製作方法と無関係ではない。一方で、変容が著しいとは言え、突帯で各段を区分して透孔を配置する点で、デザイン上はⅡ型式との関係も無視できない。ここでは、円筒埴輪（Ⅱ型式）の一系列として捉えておく。

このほか、高敞・七巖里古墳やソウル・風納土城慶堂地区からは、日本列島と同様のハケメ調整をもつ埴輪片が各1点出土している。⁽⁸⁾ 両者とも窖窯焼成で橙褐色に焼き上がり、タテハケ調整である。突帯の形状も日本列島のものと比較して遜色がなく、日本列島からの搬入品である可能性がある。ただし、七巖里古墳からは、前述のように外面タタキ調整の埴輪も一定量出土しており、むしろハケメ調整の埴輪は同古墳のなかでは客体的な存在である蓋然性が高い。推測の域を出ないが、出土量がごくわずかであることからすると、七巖里古墳のハケメ調整の埴輪は、日本列島から見本として持ち込まれたものである可能性が考えられよう。

2. 5世紀～6世紀前半の日本列島の円筒埴輪の様相

ここまで、十分な説明なしに日本列島の埴輪と比較しながら栄山江流域の埴輪について論じてきたが、当地域の伝播・展開過程を正しく理解するためには、まず、日本列島の同時期の円筒埴輪の様相（5世紀～6世紀前半・円筒埴輪編年のⅣ・Ⅴ期）を押さえておく必要がある。とは言え、紙幅に限りもあるため、比較の上で重要となるポイントを形態的特徴、製作技法に分けて列挙する。

① 形態的特徴

- ・各段を突帯で均等に区分するが、底部高がその他の段を若干上回る例も存在する。上方に向かって若干、径が増す程度で、途中で屈曲等の極端な器形の変化はない。
- ・口縁部もほぼ直立する単純な形状（大型品などの特殊なものを除く）である。5世紀前葉には端部を小さく折り返すものがあるが、時期が下るにつれて省略される。
- ・透孔は円形で、一段中の対置する位置に2孔を配置することを原則とする。
- ・朝顔形埴輪は原則として二重口縁であり、一次・二次口縁の境界と頸部に突帯を貼る。

② 製作技法上の特徴

- ・内傾接合で粘土紐を巻き上げる。一定の高さで巻き上げを休止し、乾燥期間を挟みながら、正立成形で全体を形作る。東海地方周辺では、5世紀後葉以降、倒立技法が出現する。
- ・突帯の貼付に際して、工具を用いて割付をおこなう。4世紀以前には多様な手法が存在するが、5世紀以降はL字形の工具を用い、間隔を測定しつつ同時に水平線を引く凹線技法に統一される（図4E）。5世紀後葉になると、割付技法が放棄され、任意で突帯が貼付けられるようになる。
- ・突帯は粘土紐を指で押さえながら一次的に貼付けた後、板状工具で押圧を加え、最終的にヨコナデして仕上げる。5世紀後葉以降、突帯成形時に粘土紐を指で乱雑にナデつける「断続ナデ技法」が出現し、これにより突帯が著しく低平化する。
- ・器面調整は、粘土紐の接合痕跡を消すようにナデ調整した後、ハケメを施すが、内面や外面最下段はナデ調整のまま放置される場合もある。5世紀代では、タテハケの後に突帯間をヨコハケ調整するものが多く、一定間隔で工具を静止した際の痕跡が筋状に残る（B種ヨコハケ）。

こうした埴輪の特徴は、王権が所在した近畿地方中部を中心に標準化されたもので、埴輪製作に関する情報は、多かれ少なかれ、同時期の日本列島各地に伝播している。とりわけ、上述のような製作技法上の細部の特徴が各地へも波及していることから、その背景には一定の製作者の移動が

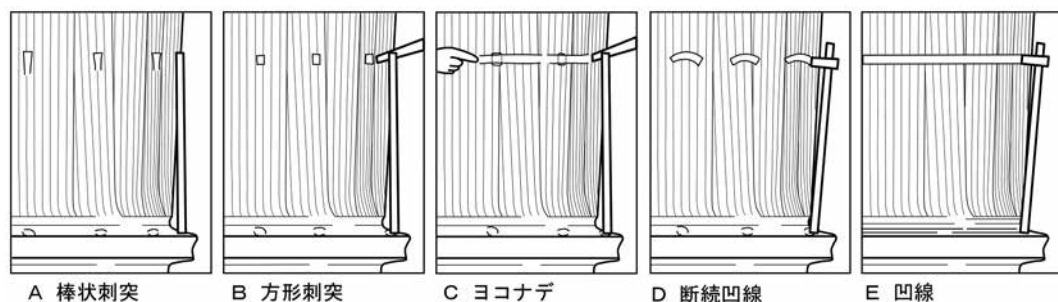


図 4 日本列島の埴輪の突帯割付技法復元模式図（廣瀬2015）

存在したものと考えられる。従来、栄山江流域の埴輪については、そうした製作技法の共有が見出せないことから、製作者の移動を介さないような間接的な波及によるものとの理解がなされてきた[大田1996]。あるいは、倭王権中枢では主体化しない倒立技法を介した周縁地域との直接的な交流が読み取られてきた[小栗1997・2000]。しかしながら、近年の新出資料を踏まえると、これらのかつての見解については再考が必要と考える。以下、倒立成形系列と突帯割付系列を取り上げ、従来の理解を批判的に検討する。

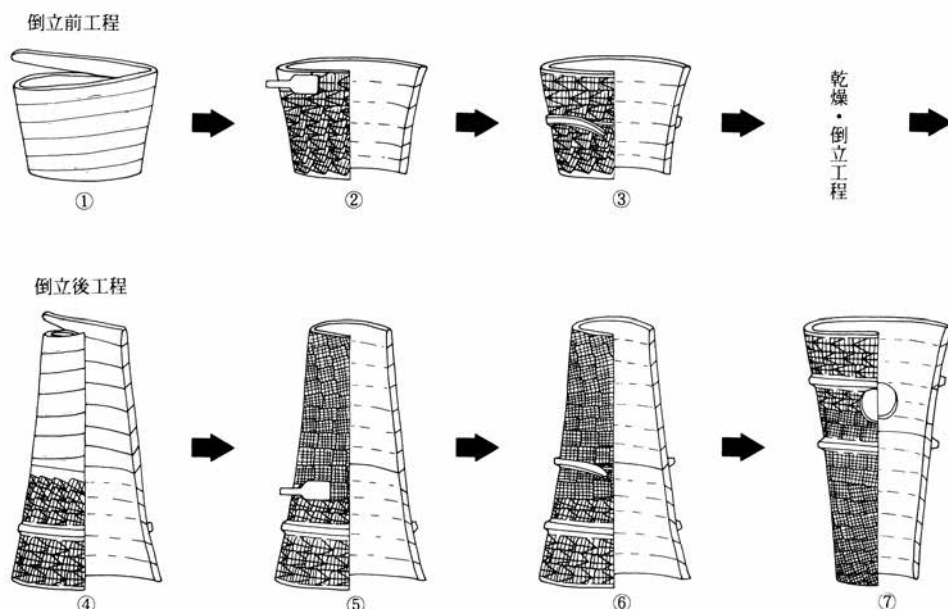
3. 倒立成形系列の検討

まず、栄山江流域に最も多い倒立成形系列については、いずれも先行して成形した上半部を倒立し、その上部に下半部を積み上げ、再度、天地を反転させて完成に至るという工程をとる点で共通する。その工程は前述のように、かつて小栗明彦が月桂洞1号墳の円筒埴輪において復元した製作手順がほぼそのまま該当する(図5上)⁽⁹⁾。その上で小栗は当初、北陸から朝鮮半島へ[小栗1997]、その後、逆に朝鮮半島から東海地方へ[小栗2000]と、倒立技法を携えた製作者の移動を推定した。しかしながら、小栗自身が認めるように、日本列島の円筒埴輪で用いられる倒立技法は、先に成形した下半部を倒立させ、その上に上半部を成形する手順が一般的である(図5下)。倒立技法と言っても、その内実は全く異なるものであり、両者の間に製作者の移動を介した直接的な関係を読み取ることは困難である。

倒立成形による円筒埴輪製作の合理性は、粘土内の水分が重力に即して下方に移動する現象を利用して、先に乾燥が進む巻き上げ休止位置を反転させ完成時の底部とすることで、上部からの荷重による器形の変形を防ぐと同時に、生乾き状態にある製作当初の底部を接合面として倒立後の粘土紐の巻き上げを再開することで、乾燥状態の相異による粘土の接合力の低下を回避できることにある。すなわち、高さのある筒形の器形を効率よく成形する上で相乗的な効果が得られるのであり、浅田博造が指摘するように、倒立技法の採用は円筒埴輪1本あたりの製作時間の短縮に寄与したものと推測される[浅田2004]。

この観点からすると、栄山江流域の倒立技法よりも、下半部を一度だけ反転する日本列島の倒立技法の方がはるかに合理的な製作方法といえる。倒立技法は、小栗も指摘するように複雑な器形が存在する一般的な土器製作の中に元来含まれる可能性があるが[小栗1992]、日本列島では埴輪の祖型である特殊器台や一部の形象埴輪を除くと、須恵器技法との関連が濃厚な埴輪群においてのみ採用される事実がある。このことからすると、日本列島の円筒埴輪における倒立技法は、栄山江流域の埴輪製作技術とは直接的な関係はなく、須恵器の製作技術を介して伊勢湾沿岸を中心とする地域で出現したものと推測される。

では、栄山江流域で反転作業を2回おこなう複雑な倒立技法が出現した要因はどこに求められるのであろうか。この点については、羅州・徳山里9号墳、同・新村里9号墳のような上半部に壺・鉢形を表現する埴輪の製作工程に起因すると考える。同様の埴輪は、近年、高敞・旺村里2号墳でも出土をみており、この地域において一定の広がりをもつ蓋然性が高まっている。ここではこの種の埴輪を徳山里9号墳タイプと仮称することにすると、このタイプの円筒埴輪は、上半部に明確に壺・鉢の形状を表現することに加えて、下半部との境界に鐙状の高い突帯を巡らせる点で、他の倒

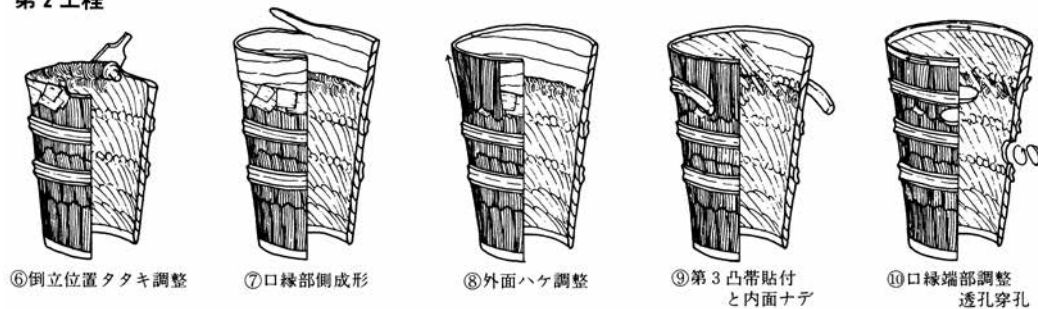


小栗明彦による月桂洞1号墳における倒立技法の復元模式図(小栗1997)

第1工程



第2工程



日本列島における一般的な倒立技法の工程(矢田野エジリ古墳・樫田1992)

図5 日朝の円筒埴輪における倒立成形技法の相異

立成形系列の埴輪との形態的相異が大きい。一方で、壺・鉢の形状を呈する上半部の底は中空となっており、円筒形の上に単純に土器を接合したものではない。むしろ壺・鉢形の土器そのものと円筒形の下半部を分割して成形した上で接合する方が、技術的には容易であるにもかかわらず、中空形状で両者が形作られている背景には、上半部に載せる土器は底抜けであるべきとの強い意識の存在が看取できる。

いずれにしても、上下一体でこうした造形を形作る場合、下半部を先行して成形すると、下半部上端の形状に上半部の製作が規定されてしまうため、上半部において土器本来の形状を表現することが困難となる。実際、徳山里9号墳、新村里9号墳、旺村里2号墳では、先に土器形状を表現する上半部を製作して倒立させ、その上に粘土を巻き上げて下半部を製作しているのである。とりわけ、徳山里9号墳例の壺の形状は、体部が球形を呈し、口縁部が短く外反する広口壺そのものの形状を正確に表現できているが、そうした本来の土器形状に忠実な上半部の造形は、上半部を先行して製作するからこそ可能であったと言える。

これに対して、チャラボン古墳以降の倒立成形系列の埴輪は、日本列島の円筒埴輪のように単純な筒形となり、鰐状の突帯もみられなくなるが、反転作業を2回ともなう決して合理的とは言えない倒立技法を引き続き採用することから、技術系譜上は徳山里9号墳タイプの製作の延長線上に位置づけられる。すなわち、新たな円筒埴輪に関する情報の伝播を受け入れつつも、継続的に製作に従事する工人（製作者）によって徳山里9号墳タイプの製作工程が維持、継承されたものと考えられる。その徳山里9号墳タイプから通常の円筒埴輪の形状に移行した初期の姿がチャラボン古墳例と理解する。チャラボン古墳出土埴輪の一部の下半部に屈曲や外反が生じている点は、徳山里9号墳タイプの上半部と下半部の境界に作り出される屈曲部のルジメントととらえれば合点がいく。徳山里9号墳タイプの中では、新村里9号墳や旺村里2号墳にみられる上半部が鉢形を呈する埴輪との形態的な類似性がより高く、両例の屈曲部をやや下方に移行し、鰐状突帯をやや上方に移して突出度を抑えることで、チャラボン古墳の円筒埴輪の形態が成立するとみることができる。

従来⁽¹⁰⁾の林永珍による編年では、ここでのいう徳山里9号墳タイプが筒A形、明花洞古墳や月桂洞古墳群例が筒B形に区分され、両者は時間的に併行する異なる系列として位置づけられてきた[林永珍2002]。これに対して、近年の朴亨烈による編年は、両者を同一系列内での時期差として捉える。上述のように筆者は、同じ内容の倒立技法を用いる同一系列内での形態変化という視点から、朴亨烈の変遷観を支持する。朴亨烈は、ここでのいう徳山里9号墳タイプ内の新古についても、上半部の壺・鉢形の形状がより整っている羅州・徳山里9号墳を古く、やや形骸化のみられる同・新村里9号墳の方を新しく位置づけ、林永珍による変遷観を逆転させて理解するが、筆者も同意見である。補足するならば、新村里9号墳や旺村里2号墳の上半部が鉢形を呈する埴輪には、鰐状突帯に加えて、徳山里9号墳ではみられなかった上半部の中央にも突帯が付加されており、両突帯の間に大型の透孔を配置する点で、チャラボン古墳の円筒埴輪の形状への接近を見て取ることができる。

さらに、チャラボン古墳以降の倒立成形系列の変遷観についても、概ね朴亨烈の変遷観に賛成する。すなわち、朴亨烈は従来、林永珍や大竹弘之によって月桂洞1号墳→月桂洞2号墳→明花洞古墳と編年されてきた図式[林永珍2002、大竹2001]を逆転させ、器形の単純化や口縁部の直立化を主な指標として、明花洞古墳→月桂洞2号墳→月桂洞1号墳の順に位置づける。小栗明彦は当初から、口縁部端部の直立化にもとづいて、明花洞古墳→月桂洞1号墳とする理解を示してきたが[小栗2000]、この朴や小栗の形態変化にもとづく変遷観は、特徴的な倒立成形を採用する系列内での連続性、およびその出発点が徳山里9号墳タイプであることが判明したことにより、合理的かつ実証的に説明することが可能になったと言える。

すなわち、口縁端部を強く折り返す特徴は、徳山里9号墳の鉢形タイプの埴輪以来、この系列内

で継承され続ける属性であり、次第に屈曲度を弱めながらも、月桂洞1号墳に至って完全に折り返しを放棄した単純口縁が出現するに至る。また、徳山里9号墳タイプの上・下半部の形状に起因する器形の屈曲・外反は、チャラボン古墳や月桂洞2号墳に継承された後に消失する。月桂洞2号墳は、墳丘が1号墳よりも小規模なこともあり、1号墳に続いて築造されたとする理解が大勢を占めるが、一条目突帯部分に上半部と下半部の境界、およびそれにもなう器形の屈曲が残存しており、そうした特徴が一切残存せず、上述のように口縁部の折り返しが消失する1号墳の方が後出するとみて間違いない。ただし、単口縁の朝顔形埴輪の形状が2号墳と1号墳で酷似することから、両者の埴輪生産は継続的であったものと推測される。

このように、チャラボン古墳の埴輪の様相が判明したことにより、栄山江流域の倒立技法を採用する円筒埴輪の展開を系統的に理解することが可能となった。改めてこの系列の変遷過程を整理すると、器台の上に壺・鉢を載せた形状を表現する徳山里9号墳タイプを祖型としつつ、チャラボン古墳以降、単純な円筒形のスタイルが志向され、最終的に月桂洞1号墳で口縁部が単純化する流れとして理解できる（図6）。系列の後半段階に位置づけられる月桂洞古墳群では、2号墳で単口縁ながら朝顔形埴輪が導入され、続いて1号墳では透孔の形状が円形主体となることから、断続的に日本列島からの埴輪の形態に関する情報が流入していたことは疑いない。しかしながら、同時期の日本列島では姿を消した三角形や半円形の透孔が遅くまで残り、穿孔数も最後まで日本列島のように一段2孔に統一されることはない。製作技術に関わる詳細な情報も受容されることはなかったとみられる。むしろ、一貫して特徴的な倒立技法が使用され続けることから、製作自体は安定的に推移したものと推測される。製作技術のみならず、一部の形態的な属性も系列内で継承されていくことから、この系列の埴輪を採用した流域内の古墳間では、製作者の移動を介して形態情報や製作技術の伝習・共有がなされたものと理解できる。この点は、当該期の栄山江流域の古墳築造の歴史的背景を理解する上で極めて重要となろう。

4. 突帯割付系列の評価

前述のようにこの系列では、全体を正立成形するとともに、突帯製作において割付や板押さえ（タキキ板による）といった日本列島の埴輪で駆使される技法が採用されており、倒立成形系列とは明らかに技術系譜を異にする。従来、老迪遺跡出土の埴輪は、上述の倒立成形系列と同等に扱われてきたが、突帯割付系列として分離して扱うべきである。老迪遺跡および金山里方台形古墳出土の埴輪は、栄山江流域で唯一となる二重口縁の朝顔形埴輪や形象埴輪が共伴することからも、七巖里古墳などの搬入品の可能性のあるものを除くと、現段階で日本列島の埴輪に最も近い一群と言える。

しかしながら、これらの埴輪も前述のように日本列島の埴輪そのものではない。端的に言うと、同時期の日本列島の埴輪とは主に形態的特徴が大きく異なる。とりわけ最上段が狭く、外反度の大きい口縁部形状や、円形以外の形状のものを含む一段4孔の透孔配置は、日本列島では4世紀中葉以前の初期の円筒埴輪にみられる特徴であり、二重沈線（凹線）による突帯割付技法や馬形埴輪が存在する時期の円筒埴輪の形態としては違和感を禁じ得ない。こうした埴輪の形態・デザイン上のタイムラグがどのようにして生じたのか、現状では明快な説明が困難である。すくなくとも、突帯割付技法における二重沈線の採用や、突帯端面を板で押圧する技法は、日本列島では窖窯焼成導入⁽¹¹⁾

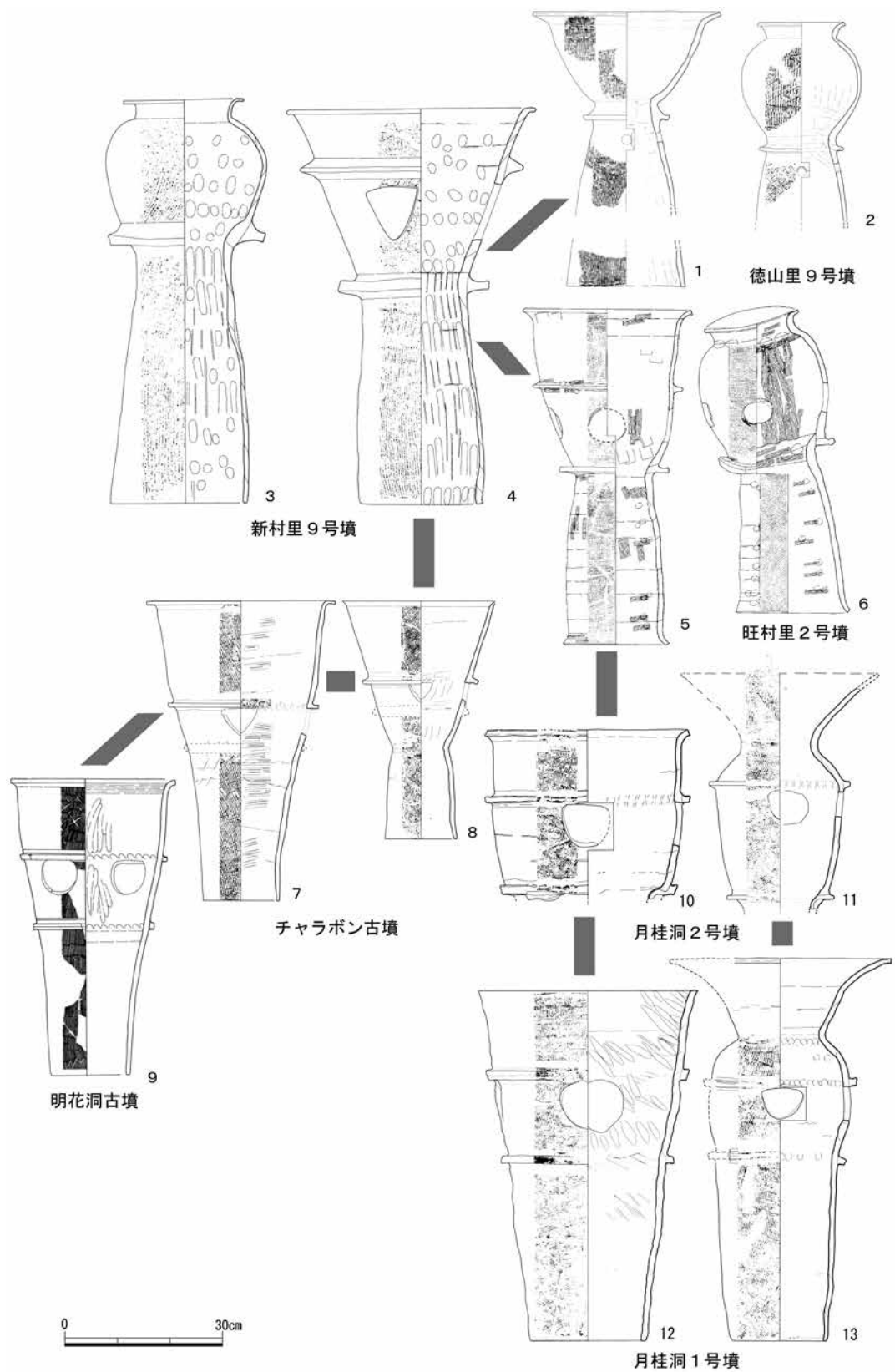


図6 倒立成形系列の変遷推定図 (1:12)

後の 5 世紀中葉に顕在化するものであり、金山里方台形古墳（老迪遺跡）例は、その頃以降に日本列島から埴輪製作に関する一定の情報を入手した上で製作されたものと理解できる。

問題はそうした製作に関する細部の情報を受容する一方で、リアルタイムの埴輪の形態的特徴が採用されていない背景をいかに理解するかである。なぜなら、日本列島では、そうした細部の技法が王権中枢から伝播している場合、形態的特徴も忠実に伝播している場合が一般的であるからである。むしろ、技術を携えた製作者の移動が前提となる技法の伝播よりも、間接的な情報伝達でも再現可能な形態的情報の方が、より迅速かつ広範囲に広がるイメージがある。こうした図式に反する金山里方台形古墳（老迪遺跡）例のあり方は、日本列島内でモデル化してきた埴輪伝播のあり方に再考を迫るものといえる。

この点を考える上で参考になるのが、前方後円墳の南限地域の状況である。鹿児島県大崎町横瀬古墳は、採集須恵器から TK216 型式期に位置づけられる墳丘長約 140m の前方後円墳であるが〔橋本 2008〕、同古墳から出土した埴輪は、円形透孔を一段中に 4 孔配置する点で古い形態的特徴をとどめている。底部高 23cm 前後、突帯間隔 17cm 前後という規格、全面を板ナデする外面調整のあり方は、同時期の王権中枢部の様相からは乖離する。一方で、最下段外面には器面調整の板ナデとは無関係に横方向の擦痕が残し、突帯上面にも細い溝状の擦痕がみられることから、L 字状工具を用いて凹線を引く突帯割付技法の使用が確実視される。断片的ながら細部の製作技法が受容されている一方で、同時期の一般的な円筒埴輪とは形態的相異が著しい点は、金山里方台形古墳（老迪遺跡）と同様であり、「前方後円墳築造周縁地域」〔九州前方後円墳研究会 2003〕に共通する現象として注目される。

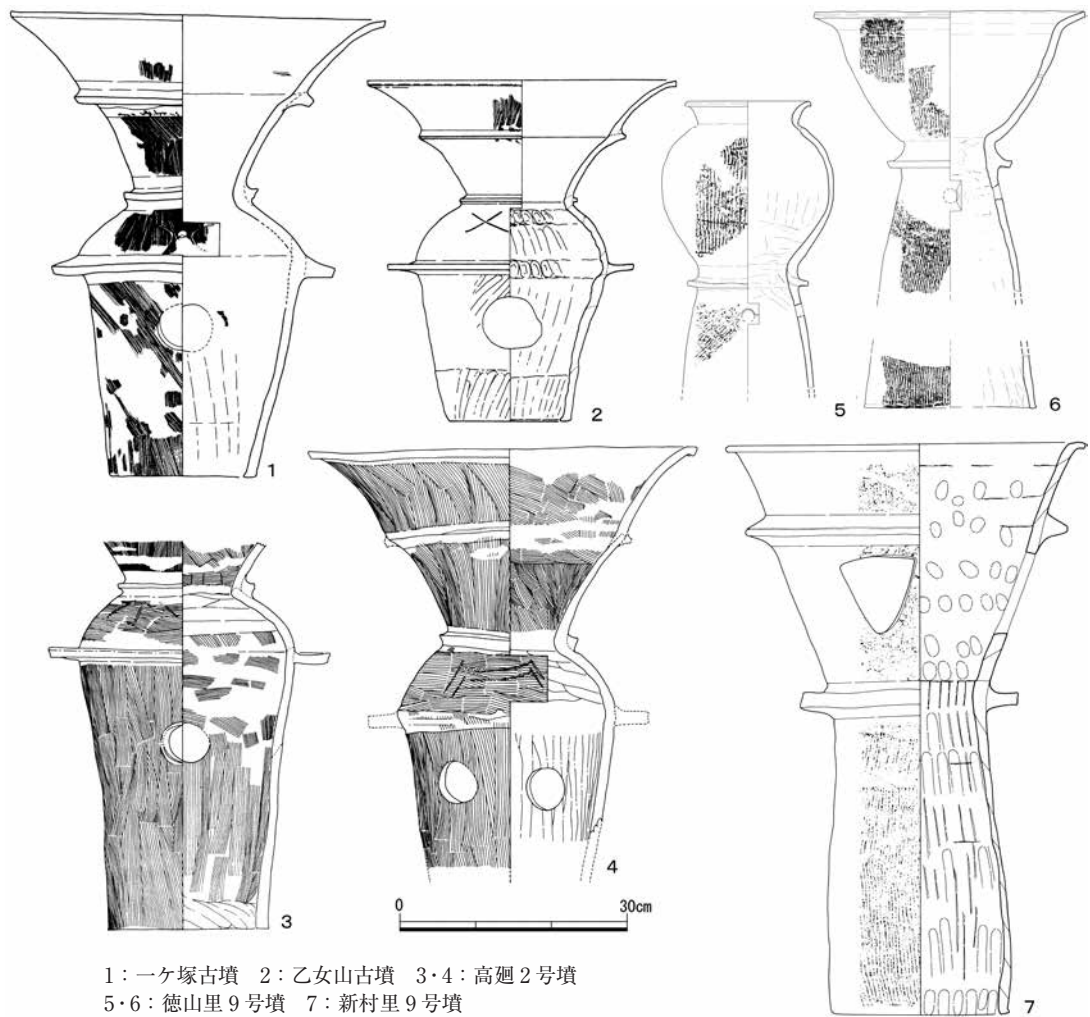
こうした突帯製作に関わる細部の技法伝播の背景には、やはりその情報を携えた製作者の移動が不可欠であろう。しかしながら、以上のような栄山江流域や南九州の状況は、埴輪製作の総体ではなく、詳細ではあるが特定の限定された情報のみが伝播するような実態が存在したことを示している。「周縁地域」よりも幾分、倭の王権中枢との距離が近く、大型前方後円墳を頂点とする階層構成型古墳群として築かれた宮崎県西都原古墳群や群馬県太田天神山古墳周辺では、人数的にはごく少数である公算が高いが、王権中枢での埴輪製作の経験を有し、同時期の王権中枢の形態・技法を総体として伝達する工人が確実に存在していることを踏まえると、⁽¹²⁾「周縁地域」ではそれらとは距離を置く別の伝播のあり方が存在したことになる。

具体的な現象を推測することは容易ではないが、例えば、列島内のいずれかの場所で埴輪製作に携わったものの、わずかな作業量で十分熟練するには至らなかった人間が、断片的ながらその情報を持ち帰って栄山江流域や南九州で埴輪生産に従事した可能性などが考えられよう。ただし、同時期の日本列島では省略傾向にある口縁部の外反・屈曲表現や透孔数を古式の様相のまま墨守する点には、敢えてそうした省略傾向を受け容れない実直な姿勢を読み取るべきかもしれない。いずれにしても、形象埴輪や突帯割付技法が確認された金山里方台形古墳（老迪遺跡）例をもってしても、現状では日本列島の工人・製作者が栄山江流域の埴輪製作を直接指導するという図式を描くことはできない。むしろ、在地勢力による形象埴輪を含めた埴輪配列行為の主体的な導入姿勢を積極的に評価すべきと考える。

おわりに

以上のように、近年の新資料を踏まえて再検討した結果、栄山江流域の円筒埴輪には、明確に技術系譜を異にする2系列の展開が認められることが明らかとなった。この他に有底穿孔系列とした沃野里方台形古墳例や、現状では系列として認定することを保留した外面タテハケ調整を採用する埴輪も存在しており、この地域の埴輪の展開過程が一元的なものではなかったことがうかがえるようになってきた。円筒埴輪の導入契機は、複数存在したとみて間違いなく、流域内の各勢力と日本列島との多角的な交流を反映したものと評価される。

とりわけ突帯割付系列は、現状では分布が希薄であるものの、日本列島の製作技法の一部を取り入れる点で日本列島との関係がより濃密であり、形象埴輪が共伴する点でも注目される。ただし、形態的な特徴や器面調整のあり方には在地製作者による独自性が明瞭に表れており、同時期の日本



1: 一ヶ塚古墳 2: 乙女山古墳 3・4: 高廻2号墳
5・6: 徳山里9号墳 7: 新村里9号墳

図7 罎付壺形埴輪と徳山里9号墳タイプの形態比較(1:10)

列島の埴輪そのものではない点には注意が必要である。一般的に在地勢力の墳墓と理解される方台形古墳から出土していることから、この系列の埴輪も地域側の主体的な意思にもとづいて導入されたとみて間違いない。

これに対して、資料が増加した現在でも、栄山江流域では倒立成形による円筒埴輪が主体を占める状況に変わりはなく、むしろ上半部を先行して製作する特徴的な倒立成形技法の共有を通じて、それらが大きく一つの技術系列として把握できるようになった点は重要な成果といえる。この系列の展開の背景には、技術伝習をともなうような製作者間の直接的な交流が存在しており、流域内の各古墳の造営勢力が相互に親密な関係にあった様子をうかがうことができる。

その上で本稿では、この倒立成形系列の起点を、徳山里9号墳例に代表される、上半部に明確な土器形状の表現があり、下半部との境界に鐙状の突帯を有するタイプの埴輪に求められることを指摘した。この徳山里9号墳タイプの埴輪は、旺村里2号墳が前方後円墳となる可能性が指摘されていることを除くと、徳山里9号墳が円墳、新村里9号墳が方台形古墳であり、前方後円墳以外での採用が目立つ。とりわけ、現状で型式学的に最も古く位置づけられるのが徳山里9号墳例であり、前方後円墳ではない在地色が濃厚な墳墓において、その製作と樹立が始まった蓋然性が高い。

鐙状の突帯で上下を二分し、上半部に壺ないしは鉢を載せる徳山里9号墳タイプの起源は判然としないが、一案としては、日本列島の5世紀前半に盛行する鐙付壺形埴輪の影響を受けた可能性が考えられよう。この鐙付壺形埴輪は、日本列島で3・4世紀代に広域展開する壺形埴輪とは異なり、円筒形の台部に朝顔形埴輪と同一形状の肩部と二重口縁を作り出すものである。台部と壺部の境界には鐙状の突帯を貼り、それを支持具として別に製作した円筒埴輪の口縁部に載せて使用する。鐙状突帯の類似に加えて、盛行する年代も徳山里9号墳タイプの出現期に近いことから、両者の関連性が推測できる（図7）。

いずれにしても、囲繞配列用の仮器であり、かつ器台の上に在地的な土器を載せた形状を表現する徳山里9号墳タイプは、日本列島の埴輪を意識しつつ、栄山江流域の在地勢力によって独自に生み出された埴輪とみて間違いない。チャラボン古墳以降の前方後円墳で採用される円筒埴輪は、形状こそ日本列島の円筒埴輪に接近するものの、製作技術自体は徳山里9号墳タイプ以来の在来的な伝統に従っており、かつ、その展開過程を通じて製作者の移動を介した古墳間の密接な関係が読み取れる点は、今後、栄山江流域の前方後円墳築造の背景を理解する上で重要な視点となろう。

このように、埴輪の展開過程を系統立てて理解できるようになったことにより、栄山江流域における埴輪、および前方後円墳をめぐる議論は新たな段階に突入したと言える。断片的な資料が知られていたに過ぎない1990年代の状況からは想像すらできなかった図式が描けるようになってきた。しかしながら、本稿では日本列島の壺形埴輪に相当する有底有孔の埴周土器については、一切取りあげることができなかった。また、円筒埴輪の展開過程についても、系統関係の把握に終始したため、厳密な編年として全体を整備するには至っていない。これらの点については、今後のさらなる調査・検討を踏まえて、再考を期したい。

[付記] 本稿作成に際しての資料見学には、(財)大韓文化財研究院、国立光州博物館、国立羅州博物館、国立羅州文化財研究所、全南大学校博物館、(財)全南文化芸術財団 全南文化財研究所、

井邑市立博物館の各機関、および関係者の皆様よりご高配を賜った。とりわけ、(財)大韓文化財研究院の李暎澈院長には、資料見学や各機関との調整、韓国滞在中の様々な面において格別なご配慮を賜った。記して感謝申し上げます。

なお、本稿は、平成28・29年度科学研究費補助金(基盤研究(C))『朝鮮半島西南部の前方後円墳をめぐる倭と馬韓の交渉史』(研究代表者:高田貫太, 課題番号:16K03173), 同(基盤研究(C))『6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究』(研究代表者:廣瀬 覚, 課題番号:16K03179)の成果の一部を含む。

脱稿後、京都国立博物館科学研究費研究会・慶北大学校2018『日韓 埴輪の比較・検討と倭系古墳出現の歴史的背景』、金秀賓2018『栄山江流域円筒形土器製作技法と展開の意味』嶺南大学大学院文化人類学科考古学専攻硕士学位論文の2文献を目にした。また、金山里方台形墳のその後の調査で、人物埴輪の存在が確認されたとの報道に触れた(2018年12月発表)。以上の研究成果や新出資料については、脱稿後であったため、論旨に反映させることができなかった。改めて十分な検討の機会を持ちたい。

註

- (1)——林永珍のいう壺筒形[林2002]に該当する。
- (2)——近年、栄山江流域出土の埴輪を体系的に再検討した朴亨烈も、大部分の円筒埴輪の成形を倒立技法によるものと理解しつつ、朴が現状で栄山江流域の円筒埴輪(Ⅱ型式埴周土器)の最古段階に位置づける羅州徳山里9号墳例を分割成形によるものと捉える[朴2014]。
- (3)——リング状の規格工具等を使用すれば全く不可能でないであろうが、そうした工具が使用された形跡は一切、認められない。かつて、日本列島出土埴輪にみる淡輪技法とよばれる底部下端のリング状の圧痕に底部径を規格化するための意図が読みとられたこともあったが、近年、回転台(作業台)から埴輪を離脱させるためのものであることが論証され[辻川2007]、支持を得ている。
- (4)——李暎澈氏のご教示による。
- (5)——李暎澈は、チャラボン古墳出土埴輪をⅠ～Ⅳ型式に分類するが、その中のⅣ型式は下半部が省略されたような形状で器高が著しく、「分割成形」を用いずに一次成形のみで製作するものとする。しかしながら、該当する報告書No.173を実見したところ、現状の底部下端は磨滅があるものの破面状を呈しており、同部分で成形が収束しているとの確証は得られなかった。No.173の外面調整が多線横走集線文タタキであることから、図1-5～7にみるような下段部に明瞭な屈曲を有するタイプの下半部が剥離したものとみるのが妥当と考える。
- (6)——完成時に製品の作業台からの離脱を良くするた

めの手法とみられ、日本列島の円筒埴輪では普遍的に用いられている。

(7)——坂靖は、老迪遺跡出土埴輪のうちの1点について、風納土城慶堂地区の1点とともに日本列島からの搬入品の可能性を指摘する。後述のように、風納土城慶堂地区のタテハケ調整のものについてはその可能性は十分にあるが、老迪遺跡出土例については在来的なタタキおよびナデ調整であり、ナデ調整のものについてもタタキ調整のものと胎土は同一であることから、それを日本列島からの搬入品とみることは困難である。

(8)——風納土城慶堂地区からは、円筒埴輪片が現状で3点確認されており、いずれも日本列島の埴輪と同様に橙褐色を呈するが[漢城百済博物館2015]、外面タテハケ調整が確認できるのは206号井戸から出土した1点[韓神大学校博物館2015]のみである。

(9)——小栗は、月桂洞1号墳の円筒埴輪の観察において、下半部のタタキの施工方向は、(倒立状態で)上から下へと移行すると理解する[小栗1997]が、チャラボン古墳では、下半部のタタキはおおむね3単位程度に分かれ、下から上と施工するものが多い。同様に月桂洞1号墳でも、小栗が指摘するように上から下と施工するもの以外に、下から上と施工するものも存在するようである。ただし、タタキの重複関係は見極めが困難なものも多い。

(10)——同様に大竹弘之も、ここでいう徳山里9号墳タ

イブを筒形器台系，明花洞古墳例ほかを円筒埴輪系に大別して理解する〔大竹 2001〕。
(11)——かつて小栗明彦が説いたように，未知の 4 世紀代の埴輪の伝播を想定する〔小栗 2000〕のも一案であるが，これまでのところ，近年の当地域の活発な発掘調査の状況下においても，そうした古式の円筒埴輪の存在

については形跡すら得られていない。

(12)——列島各地の大型古墳周辺では，王権中枢での製作経験を有するごく少数の工人が，動員した多くの在地製作者を指導して，必要となる大量の埴輪の生産を賄っていたと推定している〔廣瀬 2015〕。

引用・参考文献

- 浅田博造 2004「円筒埴輪の製作技法」『味美二子山古墳』春日井市教育委員会
李暎澈 2007「壺形埴周土器登場と時点」『湖考古學報』第 25 輯
李暎澈 2015「円筒形土器製作技法」（財）大韓文化財研究院『靈巖 泰潤里 자라봉古墳』所収
井上裕一 2017「馬形埴輪の馬具・馬装について」『馬具副葬古墳の諸問題』第 22 回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料
林永珍 2002「韓国の埴周土器（円筒形土器）」『東アジアと日本の考古学Ⅱ』墓制②，同成社
禹在柄 2000「梁山江流域の前方後円墳出土円筒形土器に関する試論」『百済研究』第 31 輯
太田博之 1996「韓国出土の円筒形土器と埴輪形土製品」『韓国の前方後円墳—早稲田大学韓国考古学学術調査研修報告—』雄山閣
大竹弘之 2001「韓国全羅南道の円筒形土器」『朝鮮學報』第 181 輯（のち朝鮮学会編 2002『前方後円墳と古代日朝関係』同成社に所収）
大竹弘之 2003「韓国全羅南道の円筒形土器Ⅱ」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』同志社大学考古学シリーズⅧ
小栗明彦 1992「埴輪倒立技法の問題」『史学研究集録』第 17 号
小栗明彦 1997「光州月桂洞 1 号墳出土埴輪の評価」『古代学研究』第 137 号
小栗明彦 2000「全南地方出土埴輪の意義」『百済研究』第 32 輯（のち『埴輪論叢』第 3 号，2002 年に日本語訳として再録）
樫田 誠 1992「埴輪の分析」『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』石川県小松市教育委員会
鐘方正樹 1999「二条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』第 1 号
金洛中 2002「5～6 世紀の梁山江流域における古墳の性格」朝鮮学会編『前方後円墳と古代日朝関係』同成社
九州前方後円墳研究会 2003『前方後円墳築造周縁地域における古墳時代社会の多様性』第 6 回九州前方後円墳研究会発表資料集
田庸昊 2014「霊岩沃野里方台形古墳の墳丘築造技術と円筒形土器に関する研究」『九州考古学』第 89 号
高田貫太 2012「梁山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『古墳時代の考古学 7』内外の交流と時代の潮流，同成社
高田貫太 2017『海の向こうからみた倭国』講談社現代新書
辻川哲朗 2007「埴輪生産からみた須恵器工人—「淡輪技法」の解釈と系譜をめぐって—」『考古学研究』第 54 巻第 3 号
土田純子 2017「倭（系）遺物と共伴した土器」『東アジアと百済土器』同成社
朴亨烈 2014「湖南地域埴周土器の製作方法の変化にみる編年と系統性」『嶺南考古學』第 69 号
坂 靖 2005「韓国の前方後円墳と埴輪」『古代学研究』第 170 号
坂 靖 2009「東アジアの前方後円墳と埴輪文化」『古墳時代の遺跡学』雄山閣
坂 靖 2015「近畿地方の埴輪と韓半島南部の埴輪」『韓国の円筒形土器（埴周土器）Ⅰ』国立羅州文化財研究所
坂 靖 2016「5～6 世紀の渡来系集団と朝鮮半島西南部の前方後円墳・埴輪」『古墳時代における渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究』平成 24 年度～平成 27 年度科学研究費助成事業基盤研究（C）研究成果報告書，奈良県立橿原考古学研究所
廣瀬 覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
橋本達也 2008「肝属平野周辺の古墳時代」『大串岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 NO.3，鹿児島大学総合研究博物館

報告書

(財) 大阪市文化財協会 1990『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』Ⅱ
(財) 大阪市文化財協会 1991『長原遺跡発掘調査報告書』Ⅳ
河合町教育委員会 1998『史跡乙女山古墳―範囲確認調査報告書―』
国立文化財研究所 2009『羅州新村里 9 号墳』
国立光州博物館・光州広域市 1996『光州 明花洞古墳』
国立羅州文化財研究所 2012『霊巖 沃野里 方台形古墳』
国立羅州文化財研究所 2015a『韓国の円筒形土器（埴周土器）Ⅰ』
国立羅州文化財研究所 2015b『韓国の円筒形土器（埴周土器）Ⅱ』
(財) 湖南文化財研究院 2005『咸平 老迪遺跡』
(財) 全州文化遺産研究院 2015『高敞 金平里・旺村里・古星里遺跡』
(財) 全南文化芸術財団 全南文化財研究所 2015『咸平 金山里 方台形古墳』
全南大学校博物館 2002『羅州 徳山里 古墳群』
(財) 大韓文化財研究院 2015『霊巖 泰潤里 자라봉古墳』
(財) 大韓文化財研究院 2017『高敞 七巖里古墳』
漢城百済博物館 2015『風納土城 建国の基礎を確かめる』
韓神大学校博物館 2015『風納土城 XⅦ』

挿図出典

図 1：(財) 大韓文化財研究院 2015
図 2-1～5・7・8：(財) 全南文化芸術財団 全南文化財研究所 2015
6・9：(財) 湖南文化財研究院 2005
図 3：筆者撮影
図 4：廣瀬 2015
図 5 上：小栗 1997 下：樫田 1992
図 6-1・2：全南大学校博物館 2002 3・4：国立文化財研究所 2009 5・6：(財) 全州文化遺産研究院 2015
7・8：(財) 大韓文化財研究院 2015 9：国立光州博物館・光州広域市 1996
10～13：国立羅州文化財研究所 2015a
図 7-1：(財) 大阪市文化財協会 1990 2：河合町教育委員会 1998
3・4：(財) 大阪市文化財協会 1991 5・6：全南大学校博物館 2002
7：国立文化財研究所 2009

(奈良文化財研究所都城発掘調査部，国立歴史民俗博物館研究協力者)

(2018 年 5 月 24 日受付，2018 年 10 月 1 日審査終了)

The Process of Development of Cylindrical Haniwa in the Yeongsan River Basin

HIROSE Satoru

In this paper, we review the process of development of cylindrical haniwa or terracotta clay figures discovered in the Yeongsan river basin in the southwestern part of the Korean Peninsula. In light of the newly found materials in recent years, we present our personal opinions at this stage. Specifically, we examined the characteristics of the shapes and building techniques based on findings of observations of the *haniwa* excavated from the Yeongam Taegam-ri Jarabong Gobun, Hampyeong, and Kimsangri trapezoidal *kofun* and remains of old historical sites closely related to these. As a result, it was confirmed that the *haniwa* of the Yeongam Taegam-ri Jarabong Gobun belong to a group of cylindrical *haniwa* made using inverted molding technique common in this region. On the other hand, *haniwa* of the Kimsangri *kofun* and those from the remains of old historical sites were made using the upright molding technique similar to that of the *haniwa* in the Japanese archipelago. Besides, the arrangement technique and pressure techniques were used to create these clay bands, and it is clear that these belonged to technological genealogy previously not known in the Yeongsan river basin.

Based on the above results, the cylindrical *haniwa* in the Yeongsan river basin were broadly divided into three categories; the inverted molding system, the clay band layout system, and the perforated bottom system with the preliminary process of development shown. In particular, we point out that regarding the inverted molding system that constitutes the principal system in the Yeongsan river basin, the inverted molding production process in which the reversing task is repeated twice is fundamentally different from the inverting technique seen in some *haniwa* of the Japanese archipelago. We explain that the same procedure is a succession of the molding technique for the type of *haniwa* represented by the Deoksan-ri Gobun 9, which faithfully expresses the original earthenware shape in its upper half. The *haniwa* of the Yeongam Taegam-ri Jarabong Gobun have curving and sloping modifications in the border area of the top half and lower half portions. Hence are positioned as resource material of the period of transition from the Deoksan-ri Gobun number 9 to the *haniwa* exhibiting the standard cylindrical form. Through this transition period, one can understand the transformation to a shape that is more uniform than the previous case of the Myeonghwa-dong Janggobun and the Wolgye-dong Janggobun number 1.

In addition to these, in the Yeongsan river basin, we also intermixed sparingly; the clay band layout

system, the perforated bottom system, as well as the *haniwa* whose outer surface has undergone *tatehake* adjustment and which have a striking resemblance to the ones in the Japanese archipelago. These showcase how the development process of the *haniwa* in this region was never unified. There is no doubt that opportunities to introduce *haniwa* were numerous reflecting the various exchanges between all the powers in the river basin and the Japanese archipelago.

Key words: Yeongsan river basin, *haniwa*, the process of development, inverted molding, clay band layout system, genealogy